

---

# 願い事

バージニアスリム

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

願い事

### 【Nコード】

N9392V

### 【作者名】

バージニアスリム

### 【あらすじ】

主人公である無気力少年三島健太はある日、自信を天使名乗る少女と出会う。健太は主人公の願いを叶えるために人間界に舞い降りるが、健太には熱望する願い事がなく、取ってつけたような願いを少女に言ってしまう。その願いから二人は時間を共有することになるが、少女の破天荒な性格に振り回されてしまう健太。二人は無事願い事を叶えることができるのだろうか。

## 前編（前書き）

拙文ですが、読んでいただけると嬉しいです。  
感想等をいただけると、もっともっと嬉しいです。

## 前編

突き刺さる寒さを肌を感じながら、僕は学校からの帰り道を歩いた。二月も半を迎えたが、吹き付ける風はまだまだ冷たい。ブレザーの上から学校指定の防寒着を羽織っていても、寒さを十分に感じ取れるほどだ。時刻は午後四時を回ったところだが、夕方と呼ぶには重すぎる空が、一面に広がっていた。

今日は家に帰ったらご飯を食べて、風呂に入って、歯を磨いて、ちよつとだけテレビでも見て、そして、寝る。明日もきつとほとんど同じ。その次の日は学校が休みだから一日中家でゴロゴロすることになるだろう。友達とどこかへ出かけるのは、少しだけ面倒だ。学校が休みの日くらい家でのんびりと過ごしたい。

こんな変わらない毎が続いているから、僕は何とかやっていくのだろう。来週も、再来週も、半年後も、一年後も、もしかしたら、このままずっと。小さな嫌気と大きな惰性を感じながら、僕は過ぎていく毎日と同じように生き続ける。そんな前向きではない考え方を、どこか冷静に受け止める自分がいる。しかたないよな、と。「はあ……」

吸い込めばのどを痛いほどに冷やし、吐き出せば空気を白く染める。ポケットへ突っ込まれた僕の手は、寒さのせいでしびれてしまっている。なんの防寒も施されていない耳にいたっては、もう感覚すらない。けれど残念なことに、家に着くまでにはもうしばらく時間がかかるだろう。

家までの道のりを少しずつ消化しながら、ふと、僕は足を止めた。ズボンのポケットからはメール受信完了の音楽が流れている。緩慢な動作でケータイを取り出し、クラスの友人からであることを確認して、中身を見ずにポケットへと戻した

ケータイの画面から視線を戻すと、目の前に大きな交差点があった。この交差点を抜ければ、あとは一本道になっている。僕は何の

躊躇もなく足を前に出そうとして、慌ててもとの位置に戻した。

「うわっ！」

何かがとてつもない速さで曲がり角から飛び出してきたからである。その「何か」は僕の目の前を猛スピードで横切ったかと思うと、急に地面を転がりだした。

「……………」

呆然と立ち尽くしたまま僕は一部始終を見守った。「何か」は僕から五メートルぐらい離れた場所で動きを止めていた。バイクか車か。いずれにしろそんなところだろうと思っていた僕は、少しだけその「何か」に興味を持ってしまった。動きを止めたままピクリともしない「何か」に、恐る恐る近づいていく。

一歩近付くと、その「何か」は真っ白であることがわかった。

二歩近付くと、その「何か」はどうやら人の形をしていることがわかった。

三歩近付くと、もうどこからどう見てもそれは人間だということがわかった。

「……………はい？ニンゲン？」

しかし、人間には本来ついていないものが、その「何か」にはついている。

幻想的なまでに白く、不思議な光を放っているそれはどうみても…

…。

「は、ね……………だよな？」

「はいそうなんですよ三島健太さん！私は俗に天使と呼ばれるものでして！天使は羽根を標準装備しているのが現世での常識と聞いておりましたー！」

「は、はあ」

「で、こんなところになぜ私のような天使がいるかというんですね！なんと明日から三島健太さんにお世話になるからなんですよ！」

「は、はあ？」

アスファルトの上に体を寝かせながら、少女は突然に声を発した。

あれほどの勢いで転んでいたのだが、けがをしていないようだ。いくら見ず知らずの他人だからといって、女の子がけがをしているところは見たくない。

少女が無事であることを確認すると、今度は少女の先ほどの言葉が気になる。「天使」という言葉を連呼していたはずだ。いったい、なんなんだろう。はつきりいつて怖い。もしかしたら何か危ない薬をやっている子なのかもしれない。変な羽がついてるし。最近の世の中は狂っている、と母親が言ってた気がするし。それとも宗教の人だろうか？こんなしょぼい町にまで来て布教活動をするからには、相当大きな宗教かもしれない。

「あ、あのう。三島健太さん？どこか変なところでもありましたか？もしかして……あなたは三島健太さんじゃない……とかですか？」……まずい。もう名前まで知られている。いったいどうやったのかは知らないが、この子、相当なやり手なのかもしれない。

僕が疑心暗鬼になっていることに気付いた少女は、さっきまでの勢いとは打って変わって、おろおろとし始めた。そんな様子を見ると、なんだかこっちが悪いことをした気持ちになってくる。

「あつてるよ。俺の名前は三島健太。健太でいいよ。で、いったい何の用？ちなみに、俺、宗教とか興味ないから」

「あつ、やっぱりあつてましたか。それはよかったです。ちなみに、わたしも人間界の宗教には興味がないですよ？」

少女は返事を受け取って少しだけ表情をほころばせた。そのあまりに自然な笑顔に、僕の警戒心が小さくなってしまふ。

少女は勢いよく体を起こした。転倒のダメージは全く感じられない。無理をしている、ことはないだろう。そんな事をする必要がないし、目の前の少女を見れば、元気であることは一目瞭然だ。

「えーとですね。突然すぎて申し訳ないんですが、私は天使です。難しい話は明日にでもするとして、今日は挨拶だけをしました。残念ながら今日はもうお別れなんですが、何か聞いておきたいことはないですか？」

真顔で私は天使です、と言われてもリアクションが取りにくい。

何を聞けばいいだろう？目の前にいる少女が天使だということはまだ信じられないけど、「ほんとに天使ですか」と聞いても時間の無駄になるのだろう。そんなことよりもっと聞かなきゃいけないことがあるはずだ。もうすぐお別れだって言ってるし。早く質問を考えないと。ああでも何を聞けばいいのかわかんねえし！どうしよう！どうしよう！

「な、なんであんなに走ってきてたの？」

ああ、なんてくだらない質問をするんだ！もっと他に聞くことがあるだろ！

くだらない質問をしてしまった、と思っていたら少女にとってはそうでもないらしい。僕の質問を受けた少女はあごに手を当てて悩み始めた。

子供っぽい顔立ちのせいか、眉間に小さくしわを寄せる姿もかわいらしい。見た目十二、三歳に見える幼い顔立ちだけど、白く透きとおりそうな肌はキメ細かい。短く切りそろえられた黒髪は、幼い印象を打ち消して、何か神秘的な感じがした。来ている服は真っ白のワンピースにこちらも真っ白で薄手のロングスカートだった。「私は天使です！」という彼女なりのアピールなのだろうか。

「それは……ですね」

さっきまで悩んでいた少女は、ようやく答えが出たのか、僕を真剣な瞳で見つめた。

「えーとですね。人間界に来る前に、ちゃんとこちらの常識を知っておこうとおもいまして、初対面の人との自然な出会い方、を勉強してきました。」

「ふんふん、で？」

「どうやらこちらの世界では、男女の自然な出会い方、というのは『曲がり角で勢いよくぶつかる』が一番ポピュラーだと聞いてましたので……」

……彼女はずいぶんと狭い範囲の知識を学んできたようだ。

「他に聞きたいことなどはないですか？」

「あ、ああ」

ぼくがそういうと彼女は微笑みを浮かべた。小さな体を翻し、前を歩いて、振り返った。

「では、明日からよろしくお願いします」

「えーと、じゃあ、また明日」

ぎこちない僕のあいさつを受け取って、少女は嬉しそうにまた微笑んだ。何がそんなに楽しいのだろう。僕の話し方が変なのだろうか。それとも純粹に、僕との会話自体を楽しんでくれているのだろうか。

「あつ、忘れていました！別れの挨拶をちゃんとしないと」

少女は素早く頭を振り上げると、僕のほうに向きなあった。

「でわ。健太さん。バ、バイビー！」

……思わず固まってしまった。時代遅れなんてかわいいもんじゃない。いくらなんでも古すぎる。

僕が絶句していることにも気付かず、少女は嬉しそうに帰っていく。固まってしまった僕の眼は、軽やかなスキップを決める天使を、最後まで見つめていた。

「……いや、それ、死語からな」

言葉は白いもやとなり溶けていく。聞こえるのは吹き付ける風の音だけ。

すこしだけ、身に刺さるような寒さを忘れていた。

「改めまして健太さん。私は人間界でいうところの『天使』です。人間界のイメージに合わせた格好をしているから、私が天使であることは一目瞭然ですよね」

少女はえへんと胸を反らせて言う。



「まあ、言われてみれば天使っぽい恰好してるしな」

少女の話を、僕は適当に相槌を打った。

「あと、天使たちは幸せを運ぶ対象者以外の人間には見えないんです。もちろん触ることや、気配を感じることもできません。『人払いの法』って言うんですけどね。だからこうして私と健太さんが会話をしていることも、他の人間には認識できないんです」

「……おお。なんだかいかにも天使っぽいな」

「だけど私は力を上手に使えないので、なぜか体が雨に触れてしまうと、たちまち『人払いの法』が消えてしまうんですよ」

「ん？じゃあもし雨の日に外に出たら」

「対象者以外の人間にも見えてしまうんです。対象者以外の人間に姿を見られることはルール違反です。そうなってしまうと私は天国へ帰ることなく、消えてしまうんですよ」

「そ、そうなのか。なんかいろいろ大変そうだな」

まあよっぽどのことがない限り大丈夫なんですけどねー、と少女は補足をいれた。

学校からの帰り道を歩いていると、少女は突然現れた。何もない空間から現れたのではなく、シンプルに曲がり角から登場した。どうやらまだ曲がり角でぶつかりたいのかもしれない。昨日ほどのスピードではなかったものの、死角である曲がり角から真っ白天使が出てくるのは、あまり心臓に良くない。一度注意でもしてやろうか。僕の心配をよそに、少女は天使についてを話し続ける。

人に見られたらどうすんだと言ってやりたいが、先程の話を聞く限り人と会うことはないだろう。しかたなく、別の話題を探すことにする。

「そういえば、何を基準に判断するんだ。『幸せを運ぶ対象者』っていつの」

少女はわずかに視線をこちらに向け、困ったような表情を浮かべた。

「うーん。難しい質問ですね。いろいろと選ばれる基準というのが

あるんですが……。一番のポイントは対象者が夢を持っている、ということなんです」

少女の言葉に思わず耳を疑った。夢？そんな言葉には全然縁がないと思うんだが……。

「だからわたしは健太さんの元へやってきたんです！さあさあ健太さん！私に健太さんの持つているありったけの欲望を打ち明けてみなさい！」

「いや、そんなのないんだけど」

少女は僕のほうに顔を向けながら、その表情をどんどん変化させていった。しばらくすると、服装は真っ白なのに表情は真っ青のへんてこ天使が出来上がってしまった。どうやらよっぽどシヨックだったようだ。

「な、ないなんてそんなばかな。うそでしょ健太さん」

「い、いや。ないもんはないし……」

そ、そんなあ！とオーバーにも地面にへたり込む純白天使にあわせて足を止める。夢、ゆめ、ユメ……。どんなに考えてもそんなもんは思いつかない。小学生の頃は無責任な夢を描いたが、いまはもう、それがどんなものだったのかも思い出せない。大人になった、というわけではないと思う。現実の厳しさってヤツが、少しだけわかるようになったんだ。「将来の夢は？」と聞かれて困ってしまうのも、きつとそういうことだろう。

「本当に何もありませんか？目標みたいなの、堅苦しいものじゃなくっていいんですよ？こんなことがしてみたいとか、一度でいいからあれをしてみたいとか」

「……ごめん。どんなに考えても思いつかねえ」

そうですか。ならしかたないですよ。少女は呟き、肩を落としました。

あからさまに元気をなくした少女と肩を並べて、僕たちは歩いていく。僕たちの足取りは重く、そのスピードも遅い。少女の歩く速さに合わせているつもりだが、もしかしたら、少女が僕に合わせて

くれているのかもしれない。

「……本当に、何でもいいのか？」

少女の落ち込んだ様子を見て、僕は思わずそんなことを言ってしまった。

「あ、あるんですか！」

笑顔で振り返る少女の視線から逃れるようにして、僕は話を続ける。

「まあ、あることはある」

「そうですか！まあ当然ですよ。じゃないと私がここに来たのは間違いだったってことになりますもんね」

少女は両方のこぶしをぐっと握って、ガッツポーズを作った。

「で、それって何ですか？」

僕はまっすぐに前を見つめながら、できるだけ平べったい声で言った。

「こんな退屈な毎日を変えてみたい。できることなら、もっともつと楽しい毎日を、送ってみたい」

思いついた言葉をそのまま口に出したただだったが、いざ口から出てみると、耳に残った。少しだけすっきりとした心の中で、僕はそんなことを考える。

少女のほうに目を向けられない。なんとなく、恥ずかしいのだ。

自分の言っていることが、あまりに稚拙すぎる気がしてしまうから僕と少女は無言のまま歩き続けた。歩くスピードはさっきまでと変わらない。ただ少しだけ、足取りが軽くなった、気がする。

「ゆめ、あったんですね」

少女は独り言のように、僕を振り返ることなく言った。

「あるよ。二十秒前からな」

僕も前に目を向けたまま、そう言った

「それでは今日はこの辺で。また明日会いましょう。明日からは学校もお休みなんですよね？」

「ああ、そうだな」

明日からは土曜日、日曜日、そして創立記念日を含む三連休となっている。友達と遊ぶ約束もしていなかったので、断る理由はない。

「明日、二人で遊びに行きましょう。予定は空いてますか？」

僕は小さくうなずいて、そのまま何も言わなかった。少女もそれ以上は何も言わず、また無言の時間が流れる。

二人して何も言わず、静かに流れる時間を打ち破ったのは、天使の一言だった。

「それでは健太さん、バイビー」

……とりあえずあのへんな別れの挨拶だけは、今度会ったら注意しておこう。

せっかくの雰囲気全台無しにした天使に、ひそかに決意する僕であつた。

約束どおり、少女は次の日もやってきた。

この日僕たちは何をしたのか。結論から言うと、ぼくたちはキャッチボールをした。ただしキャッチボールといってもただのキャッチボールではない。少し一般のそれとは異なるキャッチボールをしたのだ。僕としてはお互いが交互に球を投げあうあのキャッチボールをしたかったのだが、少女が球を投げると途端に発火したり球が七つに分身したり、果ては音を立てて消滅してしまったりと、まともなキャッチボールができないのである。

何でこんなことになってしまったのかというと。

「人間界に来る時に勉強したんです！なんでも人間界にいる多くの人は、燃える魔球や消える魔球や分身魔球を投げれるとか！そういえば健太さんはまだ何も魔球を投げていませんね。もしかして出し惜しみですか？それはいけませんね健太さん。秘められた能力を解き放つべきは今ですよ！さあさあどうぞ健太さん！どんな球でもこ

のわたくしめが全力をもつて受け止めてあげましょう！こんなこと  
もあるうかと人間界に来る前にわた

という訳である。

次の日、またまた少女はやってきた。この日僕たちは何をしたのか。結論から言うと、ぼくたちはP・Kをした。ただしP・KといつてもただのP・Kではない。少し一般のそれとは異なるP・Kをしたのだ。僕としてはお互いが交互にキーパーとキッカーをするP・Kをしたかったのだが、少女がボールを蹴ると途端に発火したり、ボールが七つに分身したり、果てはボールがネットを突き破りキラッと音を立てて星になってしまったりと、まともなP・Kができないのである。

何でこんなことになってしまったのかというと。

「人間界に来る時に勉強したんです！なんでも人間界にいる多くの人は、キック力を増強させるシューズを穿いていたり稲妻シュートなる発光するシュートが打てたり打ったシュートがなぜか自然発火したりするそうですね！そういえば健太さんはまだ何も摩訶不思議シュートをうつていませんね。もしかして出し惜しみですか？それはいけませんね健太さん。秘められた

というわけである。

そして今日、約束をしていなかったはずなのに少女はやってきた。僕以外の人間に見えないので、少女は周囲を気にすることなく堂々と玄関から入ってくる。幸いなことに我が家の両親は仕事に出かけ家にいない。

「健太さん。遊びに来ましたよー。今日は何をしましょーかー？野球、サッカーときたら次はバスケットですかねー？」玄関の扉開けたまま、少女は大きな声を出した。

連日のオーバーワークのせい、それとも日ごろの運動不足のせいなのか、ふとんから起き上がるだけで体中の筋肉が悲鳴を上げている。時計を覗き込み、今が十二時であることを確認する。  
だるい。めんどくさい。ゆっくりと眠りたい。

僕はのろのろとジャージに着替え、大きなあくびを連発する。

のんびりしたい。家にいたい。もうすぐ始まる期末試験に向け、勉強するのもいいだろう。

リビングにおかれた菓子パンにかぶりつく。冷蔵庫にある牛乳を胃の中に流し込む。

「もー。遅いですよ健太さん。限りある時間は有意義に使わないと！タイムウイズマナーなんですからね！」

「いや、ウイズじゃなくてイズだからな」

靴ひもをきつく結びながら、少女の話を聞き流す。早く早くといいながら、少女はあしぶみを鳴らす。

「つーか、感謝しろよ？せっかくの休みをつぶしてまで遊んでやるんだから」

「しますします。ささ、行きましようか健太さん。早くしないと近所の子供たちに場所を取られてしまいますよ？」

僕は玄関の扉をゆっくりと開く。

「ったく。めんどくせーな」

「またまたあ。まんざらでもないって顔してますよ。健太さん」

家から歩いて五分のところにある公園に、僕たちは来ていた。

「ほらほら健太さん。早く早く」

「こっちは連日の死闘のせいで体がくたくただったのに、いい気なもんだな」

「はい？なにか言いましたか？」

「なんでもねーよ。で、今日は何をするんだ？」

「そうですねー。バスケット用のゴールがありませんので、バスケットはできませんし……。シンプルに鬼ごっこなんてどうでしょう？」

空は雲ひとつない快晴で、照りつける太陽はじんわりと体を温め

てくれる。二月といってももう半ばだ。春が来たとはいえないが、冬の季節はすこしずつ身を潜めつつある。

「鬼ごっこなあ……。二人つきりでやっても多分つまんねえぞ?」

「大丈夫です! 鬼ごっこという遊び自体が面白いので、たとえ人数が少なからうと何の問題ありません!」

「そ、そうなのか」

ただっ広いだけが特徴のグラウンドには、僕たち以外に誰もいない。『人払いの法』とやらがうまく働いているのだろう。

「それでは鬼ごっこを開始しましょう。どちらが鬼でスタートしましょうか?」

「最初は俺がやるのか。ま、どうせすぐに交代するけどな」

僕の言葉を聞くと、ニヤリ、と少女は黒い笑みを浮かべた。

「ふふふ。どうやら健太さんはまだ私のことを甘く見ているようですね。この二日間。健太さんは一度も私に勝っていないことを、忘れたわけではないでしょうに」

「あー。あ今日は変な天使パワーは使用禁止だから。フェアにこうぜフェアに」

「ええエエエ! そんなあ! いくらなんでもそれはひどいですよ! そんなことまでして健太さんは勝負に勝ちたいんですか?」

ただっ広いグラウンドの端には雑草が身を寄せ合って生えていた。花を咲かせているものは一つもなかったが、小さなつぼみを持っているものはいくつかあった。もうすぐそこまで来ている春を待っているのだろう。

「ああ勝ちたいね。こっちはこの二日間、燃えるボールをキャッチしたり、発光するシュートをキャッチしたりでもうへろへろなんだよ。それに、三連休の最後ぐらい、有終の美を飾りたいだろ」

「……仕方ありませんね。そこまで言うのなら人間界の標準身体能力のみにしておきましょう。もっとも、その程度のハンデで埋まるような実力差ではないのですが」

少女は演技がかった仕草でファサツと髪をかき上げた。

「後で泣きごと言ってもしらねえからな？」

「その言葉がすでに敗者のセリフですわよ、健太さん。せいぜい私を楽しませてくださいな？」

木の枝にとまった小鳥たちの声が聞こえる。数は少ないようで、その鳴き声もまだたよりない。それでも小鳥たちは鳴き続ける。声を仲間たちに届かせるように、すぐそこにある春をよびよせるように。

「では始めますよー。よい、スタートです！」

「……もう、だめだ。マジ……死んじゃう……」

鬼ごっこという名の拷問を終えて、僕は自室に体を投げ出ししていた。けつきよく、この三連休で天使を打ち負かすことはできなかった。三戦全敗。だけど不思議なくらいに気分はすつきりしている。日ごろの運動不足を、この三連休で解消できたおかげだろうか。

ふうっ、と大きく息を吐いて痛む体をむりやりに動かす。疲労は限界にまで達しているのだが、運動のせいで、頭が異様なまでに興奮している。テレビでも見てごろごろしよう。そう思いリモコンを探したのだが、あいにく見当たらない。仕方なしに体を引きずり、テレビ本体の電源をつける。しばらくの沈黙の後、一ハインチの地デジいっぱい、簡略化された日本地図が広がった。

「うわっ、来週からずっと雨かよ……。学校があるのにめんどくせえなあ」

お天気のお姉さんは、眉を八の字にしながら、洗濯物を干すなら今の内にと注意を促している。その横では、今日の日付の下に、お日様マークから傘マークに矢印が出ていた。晴れのち雨。早ければ今日の夜からでも雨が降る、とお姉さんは残念そうな顔をしている。

敗因の大きな原因は、僕のいらぬ一言にあった。『人間界の標準身体能力』とやらにあわせた少女は、まさに見た目どりの身体能



力だった。はつきり言つて、ぜんぜんダメダメだったのだ。まさかそこまで自分を制限するとは思つていなかったのだ、少女が鬼ごっこを楽しめないと思い、つい言つてしまった。

「もつと本気を出していいぞ？」

……今思い返してみても、あの一言は言つんじやなかつたと思う。僕の言葉を挑発だと思つた少女は、恐るべき力を見せ、僕を死地一步手前にまで追い詰めたのだつた。……精神年齢だけは見た目通りのようだ。

僕としては断固お断りしたかつたのだが、少女と写真を撮つてしまった。三戦全勝記念、らしい。最後まで拒否を唱えていたのだが、「まだ、鬼ごっこ、します？」という少女の一言が決め手となつた。ちなみに、その写真は僕の勉強机の上に放り出されている。……で、きるここなら捨て去つてしまいたいのだが、そんなことをしたら僕に明日はないだろう。

テレビ画面上は、天気予報から今日のニュースに変わつていた。昨日起こつた殺人事件が、人を変え、場所を変えて今日もどこかで起きている。そんな深刻で、けどどこにでもあるニュースをてきとうに耳で拾いながら、僕は窓の外に視線を移した。

切り取られた空には灰色の雲が充満していた。少女と出かけるころはあんなにも晴れていた青空が、今はもうない。この曇り空が、あの青空なんだ。僕はぼんやりと、そんなことを思った。

「明日、学校なのにな……」

つぶやいた言葉は、誰の耳にも届くことなく、消えていった。

僕は窓の外を見つめながら、聞いてもないニュースの音だけを、耳に流し込む。

時間がたつにつれ、暗く、重くなる空を見つめながら。

続く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9392v/>

---

願い事

2011年10月9日08時12分発行